

## 編集後記

『部落解放研究』第八号をお送りする。部落解放運動と同和教育運動をめぐる政治・社会状況の厳しさが増すなか、状況批判と研究の力もまた試されている。当研究所も、「敵」の正体を暴き、それと闘う道筋を求めて、奮闘しつつある。何をどう決り、どう撃つのか。本誌は、その奮闘の一部である。

研究所は、今夏、かねてより懸案であった理論講座の一回目を開催することができた（共催）。主題は、部落史研究の批判的・創造的展開をめざして。その折のシンポジウムの全体が、本誌の特集として再録された。議論は、近世政治起源説の再構築を軸に、部落史研究の方法と部落差別問題の基本的認識に及んだ。この成果を二回目に引き継ぎ、展開しなければならない。

本誌は、「状況を撃つ」として、二本の論文の投稿を得た。石岡論文は、広島への教育攻撃批判の視点から、教科書攻撃の経緯とイデオロギーの批判を行なった。野村論文は、沖縄人差別および同化にみる権力的・暴力的な論理構造を暴いた。いずれも、今日の状況に、また私たち自身に内在する危険を突き出した。

また、研究部会からの論文として、三本を収めた。山

名・小早川論文は歴史部会から、田坂論文・長坂論文は宗教部会からとして投稿を得た。歴史部会が、実質、動き始めた。部落史研究の水準を、地域史研究として高めることの必要はいうまでもない。期待したい。宗教部会は、宗教界の差別体質の批判と、主体的人間像の創造をめぐって、活発な議論を行なっている。投稿論文は、その成果の一部である。状況を超える思想構築に、期待したい。

本誌を、部会活動を軸とする研究活動の量的拡大と質的深化を以て、さらに充実したい。そのために、体制を十分に機能させ、研究を担う者の輪をさらに広げなければならぬ。状況の厳しさとそれを撃つ研究の重要さは、承知済みのことである。批判と創造を主導する研究は、いかにしてなるか。そのような自負を以て、前進したい。

(A)